

本論文は、『源氏物語』を中心とした歌ことば表現と、後世の『源氏物語』受容作品における歌ことば表現の変容について、歌ことばの持つ連想性に着目して論じたものである。本論文において「連想性」とは、歌ことばにおいて、季節のつながりやその歌ことばが想起させる感情など、さまざまな面で関わりのある語として想起されうるもの、といった語のレベルから、特定の歌ことばを詠みこんだ和歌が複数、並列的に想起されるようなつながりまで、網目状につながり、広がりを持ちうる歌ことばの性質を指して用いる。そのような性質に着目することで、特定の場面に特定の和歌を引用するというような、一対一対応の行為に限らず、和歌を基盤として連想的に連なる「歌にまつわることば」と、それを組み込んだテクストを広く見渡してゆきながら、これまで指摘されてこなかったことばの繋がりをあきらかにした。そして、その繋がりによってあらたに立ちあらわれる文脈を捉え、『源氏物語』やその受容作品の解釈を示した。

序章では、歌ことば表現、一般的に「引歌」と呼ばれる表現手法に関する研究の問題点を確認した。具体的には、古注釈以来の豊かな研究史の影響があまりにも強く、読みが固定化されがちで、テクストの範疇的な文脈を見過ごしているという問題である。こうした問題意識から、本論文で取りあげる論題として、一カ所の表現からさまざまな和歌、あるいは他のことばが想起される事態をとりあげることを述べた。これは、相互に連想性を持つ網目状の世界としての歌ことばの世界が、散文作品の読みに、そのつながりごと生かされていることを明らかにする狙いからである。さらには、そういった連想性の中で編まれた作品が、後世に受容される時、その時代の連想性にあわせて表現もまた変容し、あらたな言葉の連関が見られるようになることを示すが、本論文の後半、すなわち第二部の目的であることを確認した。

第一部 『源氏物語』における歌ことば表現

第一章 『蜻蛉日記』下巻の歌ことば表現——和歌の知識共有に基づく技巧として——

本章では、「引歌」が表現技法として成熟したと言われる『源氏物語』以前に成立したと考えられる『蜻蛉日記』下巻を取りあげ、その時点ですでに複雑な和歌の利用がなされていることを、三例の特徴的な歌ことば表現から明らかにした。一例目は、直接『蜻蛉日記』に引用された和歌の周辺にあらわれることばを含め、『うつほ物語』の一節を語彙のレベルで『蜻蛉日記』の記事中に取り入れていると考えられる例。二例目は、「石上」という歌ことばから、複数の和歌が想起され、そのいずれもが『蜻蛉日記』の場面に影響を与えていると考えられる例。三例目は、『古今和歌六帖』の「五日」の項で並んでいるような、連想性のある三首の和歌を、『蜻蛉日記』の記事がまとめて引用していると考えられる例である。

このような、和歌の一節を単純に切り取って引用するだけではない、歌ことばの複雑な利用が『蜻蛉日記』に見られるのは、同時代の成立と推定される類題和歌集の『古今和歌六帖』などの成立とも関係がありうることを併せて指摘した。歌ことばのそれぞれについて、必要最低限の知識のレベルが、和歌の手引書としての性質を持っていたであろう『古今和歌六帖』

によって示されていると考えられるからである。

これらの検討を通して、『蜻蛉日記』下巻における引歌からは、作品成立当時の、和歌の知識共有に対する自覚が高まっていた時代状況を読み取ることが可能であると位置づけた。

第二章 『源氏物語』の朱雀院と「心の闇」

本章では、『源氏物語』でもっとも多く引用される「人の親の心は闇にあらねどもこをおもふ道にまどひぬるかな」について、引用の「型」となっていた「心の闇」という形が、朱雀院には一切用いられないことを取りあげた。朱雀院は従来、愛娘女三宮のことを想うあまり、仏道修行に専念できない人物として解釈されてきた。しかし、「心の闇」が使用されない一方で、当該の和歌が朱雀院にかかわって引用される時、「子」「道」の二語が繰り返し用いられており、異なる「型」を形成していると言えるような状況がある。これらのことから、朱雀院像にかかわる表現を考える上で重要なのは「道」の語であり、「こをおもふ」道にも、「仏」の道にも、完全には足を踏み入れることができない、朱雀院の皮肉なありようが、新たな「型」により示されているのだと位置づけた。

従来、「人の親の」の歌の唯一の「型」であるように捉えられてきた「心の闇」からはずれる、朱雀院にまつわる当該歌の利用が、じつは「道」を「型」としていたことを指摘する本章は、一首の和歌においても多様な「型」が生成されうること、さらにはそれを読み解くことで人物造型など、作品の広い範囲にかかわる解釈をあらたに拓きうる可能性を示している。

第三章 『源氏物語』末摘花巻における「色」「きはなと見しかども」

本章では、『源氏物語』末摘花巻の終盤で、光源氏が末摘花を揶揄して書き付けた手習の一部、「色」「きはなと見しかども」について、『源氏釈』以来指摘されてきた出典末詳歌を引用している可能性は認めつつも、あわせて『古今集』の「紫の色」「きはなと見しかども」に野なる草木ぞわかれざりける」をこの手習から想起しうることを論じた。そして末摘花巻における紫の君と末摘花の対偶関係をおさえた上で、この巻が「紫」と「紅」の複層的文脈をもつことを述べた。結論として、巻の終盤に描かれる光源氏の手習については、『古今集』の歌を想起し、「色」「きはなと見しかども」を「色」「きはなと見しかども」と改変することで、「花」から「鼻」の物語へ、また「紫」から「紅」の物語へと、この巻の二重のおかしみを端的に示していると読み解くことができることを示した。

有名な古歌をもどくようにして『源氏物語』の本文に組み込み、解釈する本章の姿勢は、「物語本文に即した和歌」を探すという行為に注力するあまり、『源氏物語』の本文世界の範疇的な広がりを見ずから限定的にしてきた、古注釈以来の豊富な研究史の陥穽とも言いうる側面に対する問題提起でもある。

第四章 『源氏物語』の「なでしこ」「とこなつ」と「垣」

本章では、『源氏物語』における「なでしこ」「とこなつ」、そして「垣」に着目することで、主に紫の上にかかわる文脈において、これまで指摘されてこなかったテキスト内の連関を明らかにした。『源氏物語』正編に登場する主要な「子」のうち、明石姫君と薫のみが「なでしこ」に擬えられないことに注目し、とくに明石姫君にかかわる記述を捉えてゆくことで、

明石姫君に対する「なでしこ」の不使用は、育ての母である紫の上こそが、光源氏にとって唯一無二の「なでしこ」であるがゆえだと解釈できることを示した。そして、紫の上は光源氏の領有する「垣」の内側に閉ざされた存在として捉えられること、これまで指摘されてこなかった幻巻の「なでしこ」も、紫の上の象徴として理解されることを論じた。

このように、歌ことばの連想性を手掛かりに、『源氏物語』を広く見渡してゆくことで、これまで和歌ととくにかかわって捉えられてこなかった表現の背景にも、歌ことばで他の場面との連関が見られることを指摘した本章は、歌ことばを単体ではなく、網目状に絡みあうものとして総体的に捉えてゆくことの意義を提起する意味がある。

第五章 花散里巻の「垣根」に植えられた「卯の花」の可能性

本章では、花散里巻にたびたびあらわれる「垣根」の語に着目し、歌ことばとして読みとくことで、この巻にテキストとしてはあらわれないが、「卯の花」が強く想起されうると論じた。花散里巻は、表層としては「橘」「ほととぎす」と、懐旧の情につながるモチーフが描かれ、「なつかし」ということばが前面に出される。その一方で、「卯の花」は、歌ことばとしては「憂し」を想起させることを踏まえると、花散里巻は「垣根」という歌ことばを介在させながら、深層では「卯の花」が想起され、「憂し」ということばが通底していると解釈されるのである。この複層的な文脈を読みとくことで、花散里巻は「憂き」世を背景に感じさせ、麗景殿女御姉妹の「なつかしき」ありさまを際立たせているのだと示した。

花散里巻は、古注釈以来指摘されてきた「橘」「ほととぎす」を詠みこんだ和歌の引用の影響が強く、解釈が固定化されてきたと言える。本章は、前章につづき、これまで焦点化されてこなかった「垣根」という語に着目し、歌ことばの連想性から読みとくことで、『源氏物語』の範列的なテキストの深層を読み解くことができることを示した。

第六章 「雲居の雁もわが」とや「考」——「出典未詳歌」の捉え方の一例として——

本章では、『源氏物語』少女巻における雲居雁の発言「雲居の雁もわがごとや」をとりあげ、『源氏釈』以来指摘されてきた出典未詳歌の引用であるとわかには首肯しがたいことを述べた上で、『源氏物語』の当該箇所は『古今集』の「人を思ふ心はかりにあらねどもくもるにのみもなきわたるかな」に着想を得た可能性を指摘した。この歌を雲居雁の発言の背景におくことで、雲居雁と夕霧の恋の物語を貫く鍵語として「かり」が立ちあらわれ、この恋が「かりそめ」のものではないと、周囲が思うよりはるかに強い「恋」への思いが主張されていることが読み取れた。そして、二人がむすばれる藤裏葉巻まで、点描される二人の恋の物語において、この雲居雁の発言が響いている表現が散見されることも明らかにした。

また、『源氏物語』の当該箇所が、七音・五音と、特定の和歌を引用しているかのような形になっていることも、『源氏釈』以来の指摘に疑義を呈することを阻んでいたと言えることを述べた。本章は、出典未詳歌を捉える方法の一例として、特定の和歌をもとにしながらも、形としては新しく和歌のような形を作り出してゆく、「引歌もどき」とでも言うべきことばの使い方がありうることを提起している。

第二部 後世における『源氏物語』受容——歌ことば表現の改変を中心に——

第一章 『狭衣物語』における「見えぬ山路」

——『源氏物語』における「山路」とのかかわり——

本章では、『源氏物語』の影響をうまく受けているとされる『狭衣物語』において繰り返し用いられる「よのうきめ見えぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ」という和歌の利用には、『源氏物語』で当該の歌が利用された場面の内容が組み込まれていることを論じた。当該歌は『源氏物語』を経て、おもに「見えぬ山路」という「型」をもって後期物語では利用されるが、『狭衣物語』が「見えぬ山路」という「型」を用いるときは、『源氏物語』でその形が用いられていた場面と同様に、「ほだし」を希求するという逆説的な思いのあらわれとして機能していることが特徴的であった。さらに、「山路」「山道」ということばまで広く見てゆくと、やはり『源氏物語』の、宇治十帖の影響を強く受け、「恋の道」としての意味を持って用いられていると位置づけた。

このように、歌ことば単体での利用に加えて、『源氏物語』の内容を含んで展開してゆくというように、歌ことばが利用されることでイメージを重ねてゆくという現象について、一例をあげて論じた。

第二章 梅翁源氏における引歌——『雑鶴源氏物語』を中心に——

本章では、『源氏物語』の初期俗語訳である梅翁の『雑鶴源氏物語』を取りあげ、その歌ことば表現を分析した。それまでの注釈書と性質を異にし、その一冊で内容を理解しうることを目指した俗語訳は、『源氏物語』のテキストに分かちがたく結びついている歌ことばをいかに扱ったのかを明らかにすることが狙いである。結果として、梅翁源氏は、『源氏物語』よりも長く、和歌の歌句を引用する場合や、「ふること」であると説明を付す等、解説に近い記述での対応が大半であり、歌ことば表現と本文が渾然一体となつている『源氏物語』のテキストから、和歌を切り離して抽出してしまっているなど、肯定的には捉えにくい点も多い。しかし、和歌の知識を持たずとも『源氏物語』の内容を知ることができ、さらに歌ことばとのかかわりも知ることができるという点では、それまでの「源氏学」とも呼ばれる注釈中心の享受とは一線を画した表現上の工夫であると捉えられる。本章は、俗語訳の黎明期における歌ことば表現の扱いについて、享受史の一端を明らかにしたものである。

第三章 田辺聖子『新源氏物語』における「闇」——「恋の闇」としての利用——

本章は、『源氏物語』の忠実な現代語訳を目指すのではなく、多くの改変・創作を含む田辺聖子の『新源氏物語』について、歌ことばの観点からみても『源氏物語』からの改変が見られることを論じた。具体的には、歌ことばとして『源氏物語』本文でも特徴的な利用が見られている「闇」を切り口とし、『新源氏物語』における「闇」は、専ら「恋の闇」としてあらわれること、『源氏物語』では和歌が引用されていない箇所にも、『新源氏物語』では歌ことばが用いられている場合があることをあきらかにした。さらに、田辺の創作部分においても「闇」が鍵語として機能していることを指摘し、『新源氏物語』全体を貫くテーマの一つに「恋の闇」がある可能性を示した。

『源氏物語』を題材とし、基本的にはそのストーリーに沿って展開するものの、このよう

に敢えて改変する執筆姿勢を取った『新源氏物語』は、歌ことばの観点からも、『源氏物語』とはまったく異なるテーマが立ちあがってくる。『源氏物語』の享受史において、意図的に改変することで生じるおもしろさの一例を提示した章である。

第四章 宝塚歌劇『源氏物語千年紀頌 夢の浮橋』に見る『源氏物語』受容

——古典と現代文化を繋ぐものとしての「うた」の利用——

本章は、宝塚歌劇のミュージカル作品『源氏物語千年紀頌 夢の浮橋』を取り上げ、前章に続いて、『源氏物語』を基としながらも、意図的な改変を加え、作品独自の新たなテーマを示している『源氏物語』享受作品の存在をあきらかにした。宝塚歌劇を取りあげたのは、大衆演劇という性質上、『源氏物語』の内容に詳しくない観客が多くいること、また表現手法として「うた」を用いており、歌ことばの変容を考える上で通底する性質があることが理由として挙げられる。当該の作品は、『源氏物語』にあらわれる特徴的な歌ことばを、作品のテーマである「血筋によって縛られてゆく運命」に合わせて取り入れる一方で、『源氏物語』にはない歌ことばもあらたに取り入れるなど、前章の『新源氏物語』同様、翻案作品ならではの自由な歌ことばの利用が見られた。

現代の『源氏物語』受容作品、とくに翻案を伴うものにおいては、歌ことばは必ずしも忠実に受け継がれているとは言えないが、その変容を見てゆくことで、現代における『源氏物語』の捉えられ方を考える端緒になると位置づけた。

*

各章で論じてきたのは個別具体的問題であり、歌ことばの連想性によって、『源氏物語』のテキストの繋がりをあきらかにする、あるいは時代を超えて『源氏物語』が変容しつつ受け継がれてゆくありさまをあきらかにする、というテーマのほんの一部を論じたにすぎない。終章では、今後の展望として、まずはこういった問題にさらに取り組んでゆくことを課題として挙げた。また、関連する問題として、平安時代における、和歌知識の共有に対する自覚をあきらかにすること、そのために類題和歌集である『古今和歌六帖』と散文作品のかわりを考察してゆくことの有効性を述べた。

これらの議論を展開することの意義は、古注釈以来の豊富な研究史が、『源氏物語』の読みを固定化し、テキストが本来持っていた範疇的な文脈が見えにくくなっていく現状からの脱却を可能にすることである。したがって、これまで触れにくい面があった、古注釈における出典未詳歌の指摘をはじめとする伝統的な解釈についても、さまざまな可能性を検討する必要があると問題を提起したのが本論文である。

一方で、第二部は、古くからの研究史に縛られてきた『源氏物語』そのものの読みを捉えなおすのとは異なる意義を持つ。本論文で取り上げた作品は、『狭衣物語』を除きいずれも、あまり先行論で歌ことばの切り口から研究がなされていないものである。それは、『源氏物語』本文から離れてゆく性質を持つこれらの作品が、かつての受容研究で作品評価の基準となることが多かった「いかに源氏物語に忠実であるか」という観点においては、評価されにくいことに原因の一つが求められよう。しかし、とくに現代の作品においては、『源氏物語』成立当時とは享受者の持つ和歌知識に大きな隔たりがあるにもかかわらず、歌ことば表現がなお作品にとりいれられているという事象は注目に値する。その上で、今後の展望として、

今後は特定の歌ことばの利用について、通史的に見てゆくことで、そのことばが時代ごと
どのようなことばと連想性を持つているのかを明らかにする研究も必要であると主張した。
本論文を通して、個別の歌ことばに関する課題から、歌ことばを総体的に捉えようとする
課題まで、さまざま問題が見えてきた。今後は、歌ことばが連想性を持ち、かつ『源氏物
語』を含め、さまざまな作品の内容を含みながら変容もしてゆく柔軟なものであることを意
識した研究が求められてゆくと結論付けた。